

王之渙の作品世界

松尾善弘

—目次—

はじめに

1 「登鸛雀楼」の詩体・詩材・詩想

1-1 王之渙

1-2 「登鸛雀楼」の詩体分析

1-3 「登鸛雀楼」の句構造

1-4 「白日」を「夕陽」に訳せるか

1-5 「山」とは「中条山」を指すか

2 「涼州詞」の詩体・詩材・詩想

2-1 「涼州詞」の詩体分析

2-2 作者の位置と視点

2-3 詩想の虚構性

2-4 「怨楊柳」と「春風」の関係

おわりに

はじめに

20年ほど前、中国各地を一人旅したことがあった。ある時、夜汽車で初老の客と同室となり、暗闇の中、ベッドの上と下で四方山話を始めた。どんな仕事をしているのかと問われたので、日本の大学で「漢文」を教えていると答えると、中国の大学で「古漢語」を教え、先ごろ定年退職したばかりというその客、得たりや賢しとばかりに何事か唱え始めた。それは『詩経』や『論語』のいくつかの章句だったのだが、初めて耳にした筆者の聴解力はあまりにも貧弱であった。「请再说一遍」「请您慢点儿说」をくり返すのも業腹で、つい狸寝入りを決めこんだのだった。その時ほど目で見て分かる「漢文」と耳で聞いて分かる「古漢語」の違いを痛感させられたことはなかった。倉石博士が中国留学の帰途、「訓読法を玄界灘に投げ捨てた」と言明された意味がよく分かり、以来、「古漢語」を音読して聴解できるレベルまで研鑽を積もうと秘かに心に誓ったの

である。

その頃、張明澄氏は日本の漢学者が漢文読解の資質に欠ける実態を指摘し、次のような警告を發していた。⁽¹⁾「文学の基礎は言語であり、その国の言語を自由自在に操れない人に、なんでその国の文学が勉強できよう。人間は發生表現の動物であり、言語の中の発音・アクセント・リズムなどを十分に理解してこそ、文学を解することができるのである。」「外国人が古代日本語を学ぶとき、現代日本語をぬきにして、いきなり古代日本語に入るわけにはいかない。それと同じように、どこの国の人も、現代中国語をマスターせずに、いきなり漢文に入ることは、ぜったいに不可能である。」「いまの誤訳だらけの漢学者たちに、わたしは、漢文をやりたいなら、現代中国語から始めよ、とおすすめる。」

張氏のこの警告は、日本の漢学者といわず古今東西にわたる外国文学研究者に対するごく当り前の、そして永遠の箴言であると言うことができよう。

筆者は過去30年間、大学で中国語教学と中国古典の研究教育に携わってきた。この間の研究業績が、今後の中国学研究教育にいささかなりとも資するものがあるとすれば、望外の喜びとするものである。以下、自己評価して列記する蒙昧さをお許し願いたい。⁽²⁾

(1) 「漢字は表語文字である」とする藤堂学説及びその語源研究の成果を中国古典研究に継承・発展させた。又同時にそれらを倉石中国語教育法の中にも組み入れ、中国語学習者が中国語をより早く、むだなく、りっぱに習得する方法論として展開した。

(2) 唐詩の平仄と平仄式、押韻法その他の諸規則とそれらの関連性を整理し明確にした。又、近体詩の対句と対句の三条件を読解作業の際適用すること及び作者の位置・視点を定めることの重要性を提言した。

(3) 「漢語」「漢文」の定義を明確にし、「訓読法」の功罪を明らかにして、中国古典研究はすべてからく「音読法」によるべきことを主張した。

(4) 現代・古代漢語の文法体系を六大基本文型にまとめ、特に古漢語を正しく読み解く為には語法による点検が不可欠なことを実践・実証した。

(5) 先秦思想を歴史的唯物論の観点から「哲学」として論考すべきことを提言した。因みに『論語』は観念論哲学、『荀子』は唯物論哲学の所産である。

この間、筆者の耳には常に次のような「天の声」が届いていた。

①汝はいつの時代、どのような国に生きる学者か。②汝は何のため誰のために学問研究を生業とするのか。③汝の研究対象はどこの国のいつの時代のものか。④汝の研究法如何。⑤汝は学問の真理以外、何ものにも頼らず何ものにも阿らず、孤独に耐え困難を乗り越えて邁進する勇気があるか。

1 「登鶴雀楼」の詩体・詩材・詩想

1-1 王之涣 (Wáng Zhīhuàn) 盛唐 (688-742)

字季陵，晋阳（今山西太原）人。后徙绛。官文安县尉。豪放不羁、常击剑悲歌。其诗多被当时乐工制曲歌唱。以描写边疆风光著称。传世之作仅六首。／字は季陵、晋陽（今の山西省太原市）の人。後に絳州（山西省新絳県）に徙った。官は文安县（河北省）の尉に就いた。人となり豪放にしてとらわれず、任侠の徒と交って刃物沙汰に及び、乱世に対して悲憤慷慨することがあった。その詩には当時の楽師たちが競って曲を付け歌唱された。辺境の風光を巧みに描写することで著名となった。現存する作品はわずかに六首のみである。——『唐詩鑑賞辞典』上海辞書出版社1983（以下『T』と略記）

1-2 「登鶴雀楼」の詩体分析

Dēng GuānQuèLóu
登 鶴 雀 楼 / 鶴雀楼に登る

1. 白日依山尽 / 白日 山に依りて尽き
2. 黄河入海流 / 黄河 海に入りて流る
3. 欲穷千里目 / 千里の目を窮めんと欲して
4. 更上一层楼 / 更に上る一層の楼。

〔詩形〕 五言絶句

〔押韻〕 流・楼が下平11尤の韻を踏む。

〔平仄式〕 仄起仄終り式 (A)

- | | | |
|-------------|---------|------------------------|
| ① ●●○○● | 〔仄—仄〕 型 | } 「反法」
「粘法」
「反法」 |
| ② ○○●●○ | 〔平—平〕 型 | |
| ③ ●○○●● | 〔平—仄〕 型 | |
| ④ (○) ●●●○○ | 〔仄—平〕 型 | |

五言詩は〔2字／3字〕で切れ、七言詩は〔2字／2字／3字〕で切れる。平仄も〔○○〕か〔●●〕が原則で、〔○●〕や〔●○〕は基本の並び方にはならない。

なぜ2字が最小単位になるかと言えば、先ずリズムの基本は2拍であり、次に「孤立語」漢語の最小語構造は2字で成り立つからである。平仄の方は、もし基本2字を〔●○〕や〔○●〕にすると複雑極らない平仄式になり基本パターンを設定できなくなるからであろう。

あとの3字は〔2/1〕〔1/2〕〔1/1/1〕又は〔3〕で切れる。但し平仄は〔○○●〕と〔●●○〕が基本型で、〔○●○〕は「孤仄」、〔●○○〕は「孤平」、〔○○○〕は「下三平」、〔●●●〕は「下三仄」の禁を犯すことになる。特に「孤平」「下三平」は大禁忌事項となる。

これら2字〔○○〕〔●●〕と3字〔●●○〕〔○○●〕の平仄型に「二四不同（二六対）」の規則を適用して並べると上記①②③④の基本型が出来上る。

①は1字目が仄で末字が仄だから「仄起り仄終り型」と称する。以下、第1字目と5字目の平仄を見て②③④のように称する。但し、実作品では一字目と3字目がそれぞれ反対の平仄で作られていることが多いので（「一三五不論」の規則）、「起り」は第2字目を指して呼ぶ方が確かである。

①と②/③と④の平：仄は5：5、トータルすると10：10である。ペアー2句の第一字目平仄をそれぞれ逆にして作り、結果的に5：5になるように操作することを「救拯」と言う。平仄法の規則に違反したものが「拗体おうたい」、「粘法ねっぺい」を犯したものは「失粘しつてん」。

この四基本型に偶数句末字平声押韻（第1句末字も平声なら押韻。第3句末字は必ず仄声）の規則を適用して残り3種の平仄式を作れば以下のようなになる。

- (B) [平起り平終り式] ② ○ ○ ● ● ◎
 ④ ● ● ● ○ ◎
 ① ● ● ○ ○ ●
 ② ○ ○ ● ● ◎
- (C) [平起り仄終り式] ③ ○ ○ ○ ● ●
 ④ ● ● ● ○ ◎
 ① ● ● ○ ○ ●
 ② ○ ○ ● ● ◎
- (D) [仄起り平終り式] ④ ● ● ● ○ ◎
 ② ○ ○ ● ● ◎
 ③ ○ ○ ○ ● ●
 ④ ● ● ● ○ ◎

五言詩では（A）（C）が「正格」で実作品の9割以上を占め、（B）（D）が「変格」で作品数は少ない。

王之涣のこの作品は（A）式で作られ、転句1字目のみが基本型を外している（○を●に）。実は近体詩作品の場合、平仄を基本パターン通りにして作ったものは殆んどなく、むしろ1字か

2字の平仄を逆にしてズッコケた作品の方が多い。基本パターンに完全に一致する完整美ではなく、20分の1・2ヶ所の瑕疵のある完整美を最高美と考えたのではないと思われる。

1-3 「登鶴雀楼」の句構造

漢語の語法体系は現代漢語と古代漢語で細部の違いはあるものの骨格部分は同じである。例えば古漢語で文末に「也」をつけるとか、「所」を使って名詞化するとか、場所語の前に「於」を置くなど現代漢語ではもう殆んど見られない。逆に現代漢語で頻用する名詞述語文の判断詞「是」や介詞「把」は古漢語では殆んど使われていない。

しかし、いわばこれら枝葉の語を切り捨てて作られた漢詩句の句構造は、根幹語のみで成り立っており、現代漢語の文構造と基本的に合致するのである。言い換えると、古漢語から現代漢語への語法面の変化は語義や語音の変化に比べてかなり小さい。それは語順の厳格な「位置語」漢語の特質からもたらされるものであり、語順の大きな変化つまり語法の変化をあまり望まない言語なのである。

以下、古今の漢語文法体系を六大基本文型にまとめて提示する。

- [1] 名詞述語文（主語Sが名詞N、述語Pも名詞の文。現代漢語は普通、判断詞「是」を使う）
- [2] 動詞述語文（述語が動詞Vの文）
- [3] 形容詞述語文（述語が形容詞の文）
- [4] [S-V-O]（主語-述語動詞-目的語の文）
- [5] 主述述語文（多主語分、象ハ鼻ガ長イ文）
- [6] 存現文（場所詞/時間詞+存現動詞+主体語）

[1] は単に名詞が羅列されただけのものとの区別が難しい場合がある。古来、漢語語法体系の中にきちんと位置付けされてこなかった憾みがある。

[2] 一般の文では述語動詞の前後に副詞や助動詞、時態助詞或いは動量詞などが付く。

[3] 「比」を使って比較の文も作る。

[4] 漢語中、最も中心となる構文。Vが二つ以上あれば運動式文。Oが後に続く文の主語ともなれば兼語式文。Oは二重目的語も含む。

[5] 形容詞は目的語をとれないので、より複雑な状態を描写伝達しようと思えば主語を二つ（以上）にして表現しなければならないわけだ。

[6] 漢語語法の特徴の一つは、自然現象などを描写する時、「天下雨」のように、初めに場所詞や時間詞を言い、次に存在・消失・出現などの語義をもつ存現動詞、最後にその動作の主体となる語を言う語順をとることである。この構文の認定なしには漢詩などの句構造判定はできない

と言ってよいほど重要な構文である。

「対句」であることの確認は①語音（平仄）上②語法上③語義上で「対」をなすか検証すればよい。本詩は初句／2句、3句／4句が平仄上「反法」に則って作られ、完璧な「対」をなしていた。では、残る語法・語義上の「対」はどうだろうか。

1. 白日 (S) 依 (V) 山 (O) 尽 (V) [連動式句]
2. 黄河 (S) 入 (V) 海 (O) 流 (V) [〃]
3. 欲 (助動詞) 窮 (V) 千里目 (数量詞+名詞・O) [(我S) - V - O]
4. 更 (副詞) 上 (V) 一層楼 (数量詞+名詞・O) [〃]

1・2句は連動式構造句である。白日⇔黄河、依⇔入、山⇔海、尽⇔流がそれぞれ「対語」を成す。依／入、尽／流は動詞であること自体対照的であると看做す。

3・4句は主語（我）の省略された [(S) - V - O] 構造句である。欲⇔更、窮⇔上、千里目⇔一層楼ときれいな「対語」になっている。これを「流水対」と称する由だが、見る通り第3句の省略された主語（我）が、そのまま流れるように第4句に続いていくところから付けられた名であろう。

松浦友久編『唐詩解釈辞典』大修館書店1987（以下、『K』と略記）によれば、3・4句を「(もし) 千里の目を窮めんと欲すれば、更に上れ一層の楼」と読むよみ方もあるというので、調べてみると確かにそういうのがあった。「太陽靠近山快下去了、黄河莽莽地向大海奔流；假如你要想看得更遠一些、那就得再上一層楼。」⁽³⁾

儒教倫理観念に染ったお説教的解釈の好きな中国文人の陥り易い「迷訳」になっている。省略された主語はあくまで（我）であって（你）ではないのだ。

『K』は続いて平野彦次郎説を紹介して言う。——なお、起・承の二句は楼上の大観、転・結の二句はこの大観を得ようとする意図と解して、「更に」を「ことさらに」「特に」とし、「一層楼」を「一の層楼」すなわち鶴鵲楼とする説がある。が、漢語の語法としても、漢詩の発想としても、自然なものとは言い難い。(?)

平野氏の間違ひは、①語義上、「更」の解釈を恣意的に「ことさらに」などとしたこと。②漢語の数詞・量詞・名詞の並び方は必ず「一層の楼」となり決して「一の層楼」とはならないことを知らなかったことに困る。かかる無茶苦茶な説が罷り通り、それに対してきちんとした語学的批判・訂正ができず、自らも正解を出せないところに「訓読法の世界」の限界性があるのだ。

1-4 「白日」を「夕陽」に訳せるか

手許にある資料で調べてみると、中国出版書の多くが、「白日」を「落日」に解している。

——首句写遥望一轮落日向看楼前一望天际，连绵起伏的群山西沉、在视野的尽头冉冉而没。／初句は遙かに望むと一輪の夕陽が楼の前方一望千里にたたなずく山々に向って傾き、視野の果てにゆっくりと没してゆくさまを描いている。——『唐詩鑑賞辞典』上海辞書出版社1983（以下『T』）

——夕陽靠着山脊慢慢沉落，黄河奔腾东去流入海洋。／夕陽は山の端に沿ってゆっくりと沈んで行き、黄河は東へ奔って海へ流れ入る。⁽⁴⁾

又、前記邱氏のように「白日」をそのまま「太陽」と訳したものもあるが、実質的には「夕日」を指しているようだ。

——太陽靠近山快下去了。／太陽は山に^{もた}靠れかかりやがて沈んでゆこうとしている。

『K』は「白日」に、A=かがやく（真昼の）太陽の光、B=かがやく太陽（夕陽）の二説があるとしつつ、自身はB説を採っている。

——かがやく太陽は、山に寄り添うように沈みゆき、黄河は、遙か（世界のはての）海をめざして滾滾と流れて行く。

又、「白日」は太陽。白という字に特別の意味はないとしながら、続く「依山尽」で、落日が山脈に沿いながら沈んでゆくと欺瞞的に解説したものもある。⁽⁵⁾

日中の文学者が「白日」と「依山尽」の矛盾を解消しようと四苦八苦している姿が目につく。だが、ここで注意すべきは「白日」≠「夕日」という事実である。

〔白日〕太陽；也指白昼、白天。／〔白日〕は太陽。また白昼、昼間を指す。⁽⁶⁾

そうすると、この矛盾を解くカギは「白日」をあれこれいじくり回すのではなく、⁽⁷⁾「依山尽」の「山」の遠近、形状を詮索することにあるようだ。

そこで筆者は次の解説文を手がかりに、更に考察を進めようと思う。

——一つは白く照りかがやく太陽が高い山にさえぎられて姿をかくすというもの。もう一つは落日が山にもたれるようにして沈んでゆくというものである。⁽⁸⁾

1-5 「山」とは「中条山」を指すか

実は筆者もかつて「白日」=「太陽」としつつ、「白日依山尽」は次句の「黄河入海流」と対になって、「太陽はやがて西の山々に沈んで行く」と時間的悠久さを内包した表現として捉えるべきだと主張した覚えがある。⁽⁹⁾ つまり、「黄河入海流」は黄河が1600kmも下流の渤海湾に注ぎ込むという既知の事実に基づいて、中国の空間的雄大さを強調したものだ。中国的「対」の概念か

ら推して考えると、初句のギクシャクした描写法は、むしろこれと対照的に時間的悠久さを強調した結果なのだと「こじつけ」たのである。

だが、もしこの「山」を前記「高い山」とし、それが「中条山」であることを確認できれば、いろいろ無理を重ねなくとも一挙に矛盾は解消するのではないか。「山」が高ければ高いほど、又身近にあればあるほど、ぎらぎら輝く真昼の太陽が夕刻を待たずして山の端に依りかかり尽きてゆく現象を人は目のあたりにするに違いない。

『T』は『大清一統志』を引き次のように言う。

——鶴雀楼又名鶴鵠楼はもと山西省蒲州（今の永済県、唐代の河中府）の西南、黄河の中洲の小高い^{おか}草の上にあった。鶴雀が楼上に巢をかけたのでその名がある。

又、沈括の『夢溪筆談』の記述を引いて言う。

——河中府の鶴雀楼は三層で、前は中条山を「瞻」、下は大河を「瞰」る。唐代、ここに詩を書き留めた文士の数多い中で、王之渙の五絶は不朽の名作である。

黄河中州の小高い丘に建てられた三層の楼は、それなりの高さを持った建物であったろう。その楼から「瞻 zhān、目を上げて見上げる（『漢字源』以下『G』）」と、前面に中条山が聳えている。「瞰 kàn、上から下へかぶさるようにしてみおろす（『G』）」と下には大河が流れている。

つまり、王之渙が鶴雀楼上でこの詩を作った時、眼下に流れる黄河を挟んで西側前方にはかなりの高さの中条山が聳えており、上空には真昼の太陽が輝いていたという構図になるのである。

これら鶴雀楼周辺の地勢を暢当の「鶴鵠楼」及び李益の「同崔邠登鶴鵠楼／崔邠^{さいひん}と^{とも}に鶴鵠楼に登る」詩で跡づけてみよう。

迥臨飛鳥上 / 迥^{はる}かに飛鳥の上より臨み

高出世塵間 / 高く世塵の間より出づ

天勢圍平野 / 天勢 平野を囲み

河流入断山 / 河流 断山に入る

——鶴鵠楼は飛鳥より更に高い空中よりはるかに「臨 lín、下を見下ろして」おり（『G』）、俗世間を超越して建っている。周囲の山々が平野を取り囲むような天勢。黄河が「断山、きりたったやうなけはしい山（『大漢和辞典』以下『D』）」の間を轟轟と流れ下る地勢。

中国式オーバーな表現を差引いて考えても、ここに描かれた鶴鵠楼はかなりの高楼であり、眼下の断崖絶壁の間を黄河が滔滔と流れている状況を眼に浮かべることができる。

1 鶴鵠楼西百尺檣 / 鶴鵠楼西「百尺の檣」

2 汀州雲樹共茫茫 / 汀州の雲樹 共に茫茫

3 漢家簫鼓空流水 / 漢家の簫鼓 空しく流水

4 魏国山河半夕陽 / 魏国の山河 半ば夕陽

5 事去千年猶恨速 / 事去れば千年猶ほ速かなるを恨み

6 愁来一日即為長 / 愁ひ来れば一日即ち長しと為す

7 風塵併起思帰望 / 風塵併び起こり帰るを思ひて望めば

8 遠目非春亦自傷 / 遠目 春に非ざるに亦た自らを傷れむ

——鶴鷓樓の西側にある「百尺の牆」。「牆」はもと「帆柱」のことであるが、ここでは「牆」と同字とみて「壁」の意味にとる。すると樓の西側にある千条山（「条」には細長いものを数える量詞の義もある）は、高さ百尺（2、300mか）ほどの絶壁の「山」ということになる。汀州（水中に土砂が積って出来た沙地、中洲）の雲樹が遙か彼方まで続いている景観の中に樓は建っている。

従来、日中の唐詩研究者は「依山尽」を夕陽が西山に沈み行く状態と解し、「白日」も「黄河」との対で言うに過ぎないと考えた。⁽¹⁰⁾ だが、「白日」はやはり「真昼の太陽」でよく、「依 yī、物の陰に隠れる。物によりかかる（『G』）」と「山」＝「中条山」こそ詮索すべき問題点だったのである。

もとより、実際状況を目にしたことのない筆者に一抹の不安がないわけではない。上記行論が当たっているかどうか、「ふり仰いで見た山の端に白昼の太陽がよりかかり隠れてしまう様子」を、「黄河中高阜処」の樓に立って眺めてみたい欲望に駆られる昨今である。

2 「涼州詞」の詩体・詩材・詩想

2-1 「涼州詞」の詩体分析

LiángZhōu Cǐ
涼州詞

1 Hnánghé yuǎnshàng báiyúnjiān / 黄河遠く上る 白雲の間

2 yīpiàn gūchéng wànrènshān / 一片の孤城 万仞の山

3 Qiāngdí héxū yuányángliǔ / 羌笛何ぞ須るん楊柳を怨むを

4 chūnfēng bù dù Yùménguān / 春風度らず 玉門関

〔詩形〕七言絶句

〔押韻〕間・山・関が上平声15刪の韻。

〔平仄式〕A. 平起り平終り式（正格）

① ○ ○ ● ● ● ○ ◎ [平—平] 型

② ●●○○●●◎ [仄-平] 型

③ [●●○○○●●] [仄-仄] 型

① ○○●●●○○◎

④ ○○●●○○● [平-仄] 型

3 句目平仄は「二四不同二六対」の規則を外し「二四不同二六不同」(従って下3字が孤平)となっているが特殊型として認知される。1 字目も仄→平にズッコケているので、3・4 句の平：仄は 8：6。一瑕疵完整美作品と言えよう。

以下、残り 3 基本平仄式を諸規則に則り組み立てる。

B [仄起り平終り式] (正格)

② ●●○○●●◎ [仄-平] 型	} 「反法」 「粘法」 「反法」
① ○○●●●○○◎ [平-平] 型	
④ ○○●●○○● [平-仄] 型	
② ●●○○●●◎ [仄-平] 型	

C [平起り仄終り式] (変格)

④ ○○●●○○●

② ●●○○●●◎

③ ●●○○○○●●

① ○○●●●○○◎

D [仄起り仄終り式] (変格)

③ ●●○○○○●●

① ○○●●●○○◎

④ ○○●●○○●

② ●●○○●●◎

実作品では A と B で 9 割方を占め、C D は少ない。

2-2 作者の位置と視点

作者がどのような位置にいてどのような視点で作詩したのかを知る決め手は、その描写句の語構造を分析することによって得られる。漢詩句の解釈に先だって、漢語の特質、漢字の語源、漢語の文法を念頭に置かなければならないのである。

1. 黄河 (S) 遠上 (述語 V) 白雲間 (O) [S-V-O]
2. 一片 (数量詞) 孤城 (名詞) 万仞山 (名詞)
3. 羌笛 (S) 何 (副詞) 須 (述語 V) 怨楊柳 (O) [S-V-O]

4. 春風 (S) 不 (副詞) 度 (述語 V) 玉門関 (O) [S-V-O]

2句目は大雑把に名詞述語句と扱ってもよいし、単なる名詞の羅列と考えてもよい。或いは「一片孤城 (在) 万仞山」[S-V-O]の「在」の省かれたものと考えてもよいであろう。

『K』によれば、1句目「黄河」は「黄沙」にすべしという説があるらしい。当然「遠上」も「直上」にするわけだが、平仄上は問題がない(共に○○●●)としても、土地の人が「通天の風柱」と呼ぶ竜巻=黄沙は青天白日の「白雲間」まで立ち昇るものかどうか。どの位の頻度で起る現象なのか。かりにそれが「砂嵐」の類としても、横なぐりに吹きつけるさまはとても「直上」とは言い難い。

ごく常識的に考えてもすぐ「おかしい」ことの分かるこのような異説は出さないに越したことはなく、自らの浅学を表す以外の何物でもない。

それにしても、この1・2句には多くの誤訳・珍訳が見られる。

——黄河の上流、白雲のたなびくあたりまで、さかのぼれば、高くそびえる山々の中に、ぽつんと城壁に囲まれた要塞が見える。(『K』)

——黄河にそって、はるか上流の白雲のたちこめるあたりまでさか登ってくると、白雲のなかに天を摩すばかり万仞の山々がつらなり、そのあたりに一つだけぽつんと城がみえた。⁽¹¹⁾

筆者の頭では再読三読してもこれら訳文の意味が判然としなない。敢て平たく書き直すと次のようになるだろうか。

……ある日、私(王之渙)は数週間分の旅支度を整え、黄河に沿って千キロ以上も上流の白雲のたちこめるあたりまで遡ってきた。すると茫漠たる白雲の中に高くそびえる山々が連なり、ある山の中腹にぽつんと匈奴の騎馬兵の侵入を防ぐ要塞の城が見えた。(…???)

これらの訳者には、漢詩が古代漢人によって作られたという認識がなく、従って作者の位置・視点の確認がない。ただ己の既知の漢字の意味を恣意的に操って「迷」文を綴り、自己満足している風が見える。典型的訓読学者の悪しき習性である。

もっとも、この2句は中国の文人でさえ誤訳するほど難解な側面を持っており、それはどうやら作者の一種「奇抜な」発想に由るところ大なるものがあるようなのだ。

——従西望去、黄河遠遠而来、彷彿従白雲間流出、只見一座孤城直立在幾千丈的高山之間。／西方から眺めると、黄河が遙か遠くから、まるで白雲の間から流れ出るようにやって来る。何千丈もの高山の間にぽつんと一つの城がそびえ立っているのが見える。⁽¹²⁾

この訳者は、流石に本句の文法構造を心得ており、「黄河」を主語にとっている。しかし、「遠上(遠くに上る)」の方向が逆——こちらの方にはい上って来るになってしまっている。

つまり、この訳者は3・4句から見て作者が玉門関近辺に居ると考え、その位置から眺めた描写だから「黄河」が東方からはい上ってくると訳した。そうして筆の勢いで、ありもしない(広大な砂漠の中にいるわけだから)周囲の「万仞山」の中腹(?)それとも頂上(?)にぽつんと

「孤城」がそびえているのが「見える」とこじつけたのである。

『中国全地図』で調べると、黄河源流は崑崙山脈の東麓に始まる。チャダム盆地を中間にして北に祁連山脈、その先に阿爾金山脈。天山山脈を遙か北方に望む広大なタクラマカン砂漠中の一点として玉門関がある。その先に陽関。

筆者はかつて玉門関よりも西にある陽関を訪ねたことがある。果てなく広がる砂漠の中、いくつかの建物と亭などの点在する単なる「関所」であった。

初句「黄河は遙か白雲の彼方まで遡って行く」から判ることは、作者は長安に居て既知の事実に基づいて想像的に黄河の形状を表現しているということである。行先は名状できないのであまいに「白雲間」とした。

一方、2句「一片（①一ひら、片われなど小さなまとまりの意。②一面に広がった、長いつらなりの意。『D』）ここでは②の孤城（「城」は本来城郭に囲まれた「まち」を言うが、この場合は砂漠の中であって要塞の役もある羌族の集落と考えるのが妥当であろう）が高峻な山々の間にある」を理解するためにも、我々は中国現代地図を頭に置き想像を働かせねばならない。

長安に居る作者は、経験知として識る中国西方の広大な地勢を、始め恰も身近に見ているかのようにズームインして描写した。近くで見るとそれなりの広がり（「一片」）をもつ城郭もある集落。周囲には天を摩すばかりの山々が連なる。次に初句と同じ視点つまりカメラでズームアップすると「一片」が「一ひら」となり、「孤城」が点景となり、「万仞山」は数百キロの彼方へ遠き実状と一致する景観となる。

2-3 詩想の虚構性

『T』は、前詩「黄河入海流」と李白の「黄河之水天上来」を引き合いに出し、これらが上流から下流へ一瀉千里に流れる黄河の「動態美」を表現しているのに対し、この初句は下流から上流へ向う黄河の「静態美」を表現していると言う。

しかし、両詩は単に「動態美」と「静態美」の違いを持つだけでなく、前詩が眼前にする黄河を想像を加味した手法で大胆に奇抜に表現したのに対し、本詩は経験知に基づいて自他共に想像を逞しくする手法で、悠久な黄河と広大無辺な辺境を表現しているのである。

前詩は作者が実際に足を運んで楼上より目で観た実景と感懐を描写したものであるが、本詩は現実に目にし耳にしている景観、状態を描写しているのではなく虚構の産物なのである。

若い頃、任侠の徒として時に刃傷沙汰に及ぶこともあった王之涣は、のち節を改め学業に励んで詩人として名声を馳せるほどになった。しかし、詩話に見る如く、⁽¹³⁾ 晩年に至っても遊びぐせは抜けず（失礼！）、料亭通いをしていたとみられる。そういう作者がかつて一度でも黄河を遡る旅に出たことがあったとは思われず、辺境の地へ出かけたり、まして戍兵になったことがあるなど到底考えられないことである。

してみると、「孤城」の駐屯地で「羌笛」を聞いているのは、もちろん作者自身でもなければ作者の身代りの出征兵士でもない。すべて当時都で流行した「辺塞詩」にヒントを得、詩材を集めて、それなりにリアリティーを持って作られた虚構の作品だったのではなかろうか。

読者に想像力をかきたたせつつ味読させる作品は「受け」がよい筈だ。まして田舎者（巴人下俚）の料亭の妓女が、自分の教養と境遇にかね合せ、エキゾチックなノスタルジアや哀愁を帯びた本詩を歌う時、感極まらなかった筈はない。張氏によれば台湾では今でもバーのウェイトレスが時にこの詩を口ずさむような。⁽¹⁴⁾

邱氏が初句を「黄河が東方からはい上ってくる」と誤訳したのはいわれなしとしない。3・4句を読んだ者は誰しも作者又は作者なり代りの兵士は「玉門関」近辺の塞上に居ると考えるからである。しかし、それが「錯覚」に過ぎないことは先述した通りで、作者は一度たりとも「化外の地」へ足を踏み入れたことはなく、戍兵になったこともなかった筈である。見てきたようにウソを書いた作者を褒めるべきかも知れないが、後世の唐詩研究家にさまざまな混乱をもたらした罪は免れ得ず、逆説的になるがそのことが却って筆者に虚構性を疑わせる基になった。また、もしそこが駐屯地でもあったとすれば、カレーズやオアシスからのそれ相当の水の供給や食糧の供給がなければならぬ。つまりかなり大きな「城」でなければならぬのである。

そのように考えると、この詩は現実味があるようでない、観念に訴える側面の大きい作品であり、位置関係や状況描写の矛盾を観念的に処理しなければならぬ所以となっていると思われるのである。

2-4 「怨楊柳」と「春風」の関係

3・4句にも不可解な通釈が多い。というよりすべて同工異曲の珍訳揃いである。

——どこかで羌笛の音が聞えるが、ああ、こんなところで、なにも折楊柳などという悲しい別れの曲を吹くこともあるまい。春になつたとて、春の光は玉門関を越えては来ず、楊柳の芽ももえ出ぬものを。⁽¹⁵⁾

——今、寂しい音色の羌の笛で折楊柳の哀しい曲を吹き鳴らすことをしないで欲しい。たとえ春が来たとして、春風は玉門関を渡ってこの辺地には吹いてはこないのだから。⁽¹⁶⁾

『全唐詩』系版本は「春光」（春の日のひかり。又春の景色）。『唐詩三百首』系版本は「春風」に作る。平仄上は両語とも〔○○〕であるが、ここはもちろん吹き渡る「春風」でなければならぬ。それにしても「春風不度」が春にならない意であって、上記訳が「春になっても…」とするのは齟齬を来していまいか。また『D』が「春光」の項でこの「涼州詞」を挙例し解説するのはあまりにも不穏当というべきであろう。

『D』は「春風」の項②で「春風は和ぎ暖かであるから恩恵の深い喩」と解説し挙例している。⁽¹⁷⁾

ここが「春風」であるからこそ、4句に次の解釈が出てくる基となっているのだ。

「此诗言恩泽不及于边塞、所谓君门远于万里也。／この詩は恩澤が辺塞にまで及ばず、いわゆる君門の万里より遠きことを言う。」⁽¹⁸⁾

「(4句の真意は) 嚴寒を誇張しようとするのではなく、そこには春がないことを言い、それを借りて、朝廷が戍卒の苦しい生活に関心を寄せず、遠く玉門関まで来ている兵士に温もりを与えないことを言っている。」⁽¹⁸⁾

いかにも中国的倫理性濃厚な解釈で、果して王之涣の真意に適うものであるかどうか保証の限りではない。だが、1章の後半で李益の詩7・8句にみたように、「春」は常に別離の情や望郷の念と繋がって意識されていたことは疑いない。郷愁や別離の「怨」情は万物の萌え出る春、希望の湧く春、そして春愁の生ずる春と人間感情の底流で一脈相通ずるものがあると感じられていたのではないだろうか。

「何須」もいささか難解な用語である。『T』は3・4句を解説して言う。「この詩は辺境を守る兵士が故郷に帰れない怨みを描いているが、悲壮さの中にも退廃の情はみられず、…悲哀の情の中にも意気軒昂な感懐がある。」それは「何須怨」の婉曲表現から醸し出されるものであると。——筆者の理解力の範囲を超えるが、そう言えば、この詩にはさほど深刻な悲哀の情調が感ぜられず、むしろ単純に万人のハートに忍び込み、そこはかとなきエキゾチシズムと相俟って、望郷の感情をくすぐる作品のような気がしてならない。

…辺塞集落のどこからか哀愁を帯びた羌笛の音が聞こえてくる。守備兵の望郷の念をかきたてる「折楊柳」の曲である。今更こんな悲しい曲を吹くのはやめて欲しいものだ。帰郷の望みの持てる春がこの辺塞の地にやってくることはないのだから。

おわりに

定年退官後、中国の大学で日本語を教えることになった。日常生活はそれなりに忙しいが、教壇の中で日中両国語のあれこれの新発見があつたりして結構楽しくもある。語学教育は初級教育が大切なこと、なかでも発音教育の重要性は日を追うごとに痛感させられている。日中両国の学生が互いに相手国のことばを学ぶ時、いわゆる表意文学漢字がよくも悪くも習得に当たって大きな影響を持つことも日々見せつけられている。漢字の二面性をしかと認識して振り回されないことが肝心なのだ。現在、日中両国で起っている国語問題の多くが「漢字」に起因している事実も認めるに吝かであってはならないだろう。

中国の学生に時々「欲窮千里目、更上一層樓」を使ってハッパをかけることがある。その際、

筆者の引用句は「更上一層楼」ではなく「更下一層楼」ともじることになる。——諸君が日本語をレベルアップしようと思えば思うほど現在の自己の到達度を客観的・科学的に観察して、読み・書き・話し・聞くのどの分野に得意でどの分野に不得意か判断し、一段下がってから向上を図らなければならない。

現状をよく見て問題点を探り、自己確認してから更なる飛躍を期す。これこそが社会主義中国に生きる諸君がとるべき最良の弁証法的外国語学習法ではないだろうか。

本論文を書き上げた直後、吉川幸次郎著『続人間詩話』岩波新書1961に拙論と同趣旨の文章(その五十一王之渙)があることに気がついた。⁽¹⁹⁾

吉川博士の抜群のセンスの良さを伺わせて余りある文章であるが、残念ながら結論のあやふやさが示す通り、いまいち考察の不備が見受けられる。平仄法や句構造の分析・検証は別としても、もう一步漢字の語源追究の姿勢が欲しかった。小論と読み比べて頂ければ幸甚である。

(注)

1. 張明澄著『誤訳・愚訳』『間違いだらけの漢文』久保書店1962/1971.
2. (イ) 拙著『漢語入門(発音編)』白帝社1989.
『同(文法編)』1993. 同合冊本2004.
(ロ)『唐詩の解釈と鑑賞&平仄式と対句法』近代文芸社1993.
(ハ)『批孔論の系譜』白帝社1994.
(ニ)『唐詩読解法』白帝社2002.
(ホ)『漢字・漢語・漢文論』白帝社2002.
(ヘ)『尊孔論と批孔論』白帝社2002.
3. 邱燮友註訳『新訳唐詩三百首』三民書局1981.
4. 張国栄著『唐詩三百首訳解』中国文联出版公司1988.
5. 前野直彬・石川忠久編『漢詩の解釈と鑑賞事典』旺文社1979.
6. 孙寿玮編『唐诗字词大辞典』华龄出版社1993.
7. 『大漢和辞典』が〔白日〕①かがやく太陽。くもりのない日。②ひるま。日中。真昼。③ゆふ日。夕日。とし、〔白日依山尽〕を引き「夕陽が山の彼方に没する。鸛鷓楼から望んだ景を詠じた句。」と解説するのは浅慮の謗りを免れない記述である。
8. 前野直彬編『唐詩鑑賞辞典』東京堂1970.
9. 2の(ニ)に同じ。
10. 単に平仄上からのみ考えれば「白日●●」は「落照、落日、夕日いずれも●●」でよい。

「夕陽●○」は絶対だめであるが。

11. 8に同じ。
12. 3に同じ。
13. 唐・薛用弱『集異記』
14. 1に同じ。
15. 目加田誠著『新釈漢文大系唐詩選』明治書院1964その他多数。
16. 大川忠三著『中国古典新書唐詩三百首』明德出版社1984その他多数。
17. [宋書・樂志二]「威厲秋霜、恵過春風／威は秋霜より厲しく、恵は春風に過る」
18. 武汉大学中文系古典文学教研室选注『新选唐诗三百首』人民文学出版社1986引の杨慎《升庵诗话》卷二
19. 鹿児島県穎娃高校教諭・北村光広氏のご指教による。記して謝意を表す。

2006年丙戌春節記